

# 医療系大学生の男女共同参画・ ライフスタイル・就労継続に関する意識

— 1年生へのアンケート調査から —

津森 登志子

県立広島大学保健福祉学部看護学科

## 抄 録

医療系大学生のキャリア継続意識を明らかにするため、県立広島大学保健福祉学部の看護・理学療法・作業療法・コミュニケーション障害・人間福祉学科の1年生を対象に、男女共同参画、ライフスタイルおよび就労継続などに関するアンケート調査を実施した。その結果、学生の多くは「男は仕事、女は家庭」などの伝統的な性別役割的な考えには否定的である一方、理学療法学科以外の4学科の女子学生の6割以上は、子どもがいてもずっと働き続けたいとは希望していなかった。これらの事から、医療系大学生には、専門職教育だけではなく、初年次からの男女共同参画に関する啓発やキャリア教育の必要性が明らかになった。

**キーワード：**医療系学生，男女共同参画，キャリア教育，就労継続

## 1 はじめに

筆者は平成24年度まで島根大学医学部に在職し、基礎医学の教員を務めながら、医学部附属病院ワークライフバランス支援室の副室長として女性医療職・研究者支援事業に、また島根大学男女共同参画室の室員として全学的な男女共同参画事業にも深く関与してきた<sup>1,2)</sup>。これらの事業の中で、地域医療の担い手を育てるといふ同大学の使命を果たすためには、やはり女性医療職の就労継続支援、いわゆる家庭と仕事の両立支援は重要な事業であった<sup>3-5)</sup>。特に同医学部医学科では女子学生の比率が高く、毎年ほぼ半数近くを占める。このような現状にあつては、彼女らが将来にわたって医療職を全うしてくれるかどうかは非常に重要な問題である。一方で、女性医師のパートナーの約7割が医師であるという調査結果<sup>6)</sup>を考慮すると、将来自分と同じ職種をパートナーにする可能性を持つ医学科の男子学生が、双方のキャリアを大切にしながら家庭と仕事を両立させる意識を持つかどうかも見逃せない。これらのことから、ワークライフバランス支援室では職員の両立支援事業を策定する傍ら、学生へのキャリア教育、ロールモデル提示などにも力を入れて来た<sup>1,7)</sup>。このきっかけとなったのが、ワークライフバランス支援室が実施した学生への意識調査結果の中で、高学年になって臨床実習を経験した男子医学生は、実習経験前の学生に比較すると家庭責任に対して非常に消極的になるという現象であった<sup>1,8)</sup>。

県立広島大学では全学共通教育科目として、いわゆる初年次教育としての「フレッシュマンセミナー」を設けている。保健福祉学部では、看護(N)、理学療法(PT)、作業療法(OT)、コミュニケーション障害(CSD)、人間福祉(HW)の5学科1年生が受講し、全員参加の合同講義と少人数の班単位によるグループワーク(班毎に担当教員が就く)から構成されている。平成25・26年度は合同講義の一コマも担当し、いずれも前職での経験に基づいた医療職の就労継続と医学生の意識をテーマに話題提供を行った。この講義の中では、前述のワークライフバランス支援室による医学部学生の意識調査<sup>1,4,8)</sup>と、しまね女性センターが島根県立大学短期大学部看護学科(平成21年当時)で実施した「大学生のライフデザインに関するアンケート」の結果<sup>9)</sup>を紹介してきたが、今年度はそれに加えて保健福祉学部の学生にも同様な調査を実施して紹介した。本稿ではこの意識調査の結果を紹介し、島根大学や島根県立大学での調査を基に比較検討を行った。

## 2 方法

本学保健福祉学部平成26年度1年次生(200人)を対象に、「フレッシュマンセミナー」の各班担当教

員を通してアンケート用紙(付録)の配付と回収(2014年4月25日実施)を行った。アンケート実施に先立ち、回答結果は集計して公表する旨を学生にアナウンスした。アンケートは無記名とし、回収にあたっては個人が特定されないように配慮した。回収数は197部、回収率は98.5%、その中の2部は未回答部分を含むため対象外とし、195部を有効回答とした。回答者の各学科と男女の内訳を表1に示した。

表1 有効回答者の学科・性別内訳

学科	人数(男性, 女性)
看護(N)	63(7, 56)
理学療法(PT)	29(15, 14)
作業療法(OT)	29(7, 22)
コミュニケーション障害(CSD)	31(6, 25)
人間福祉(HW)	43(12, 31)
計	195(47, 148)

アンケートの質問内容のうち、問2~7は、しまね女性センターが実施した「大学生のライフスタイルに関するアンケート」<sup>9,10)</sup>を基に一部変更を加えた。問8~11は島根大学附属病院女性スタッフ支援室(現ワークライフバランス支援室)が島根大学医学部医学科学生を対象に実施した医療職の就労継続に関するアンケート(平成19~21年実施)<sup>4)</sup>の一部を参考に作成した。問12については、問7に関連した設問として今回新たに筆者が付加した。回答結果は単純集計し、必要に応じて男女別、女性の学科別にまとめた。男性については、学科によっては人数が少ないため(表1)、学科別の集計をして比較することは行わなかった。

## 3 結果

### 3.1 男女の役割分担等に関する意識

「男は仕事、女は家庭」については、男性の91.5%、女性の86.5%が否定的な回答をしたが(図1)、「女性は気配り、男性は決断力」には男性の59.6%、女性の54.7%が肯定的(図2)、「子育ては母親」には男性の74.6%、女性の71.6%が否定的(図3)な回答であった。女性の学科別では、「男は仕事、女は家庭」に関して他学科より肯定的な割合の高い(22.6%)HW学科では、「女性は気配り、男性は決断力」と「子育ては母親」も肯定的に捉える割合が他学科より高い(それぞれ61.3%、41.9%)傾向が見られた。

### 3.2 結婚と子ども

結婚については、男性の89.4%、女性の89.2%がしたいと回答し(図4)、子どもについても男性の

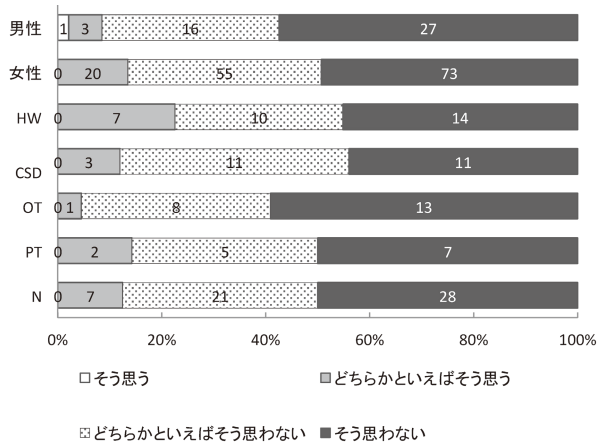


図1 「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」について。数字は人数を表す。女性については学科別も示す。

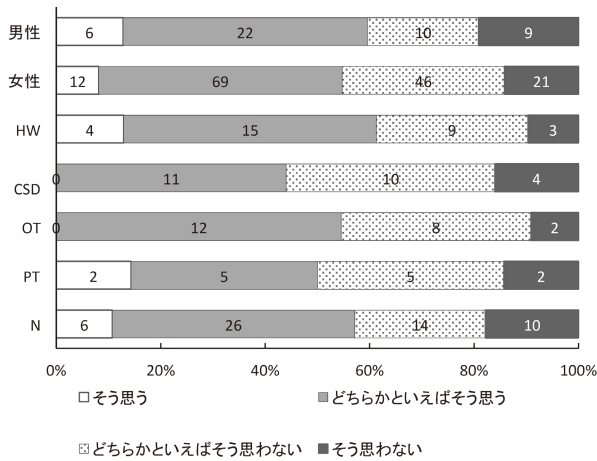


図2 「女性には細やかな気配りが、男性にはいざというときの決断力が必要だ」について。数字は人数を表す。女性については学科別の集計結果も示す。

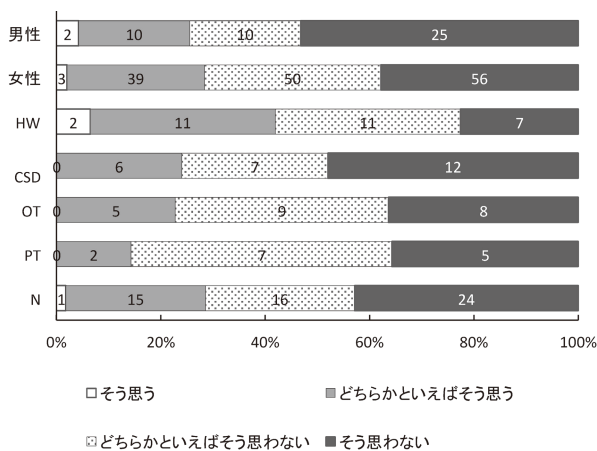


図3 「子育ては母親がするべきだ」について。数字は人数を表す。女性については学科別の集計結果も示す。

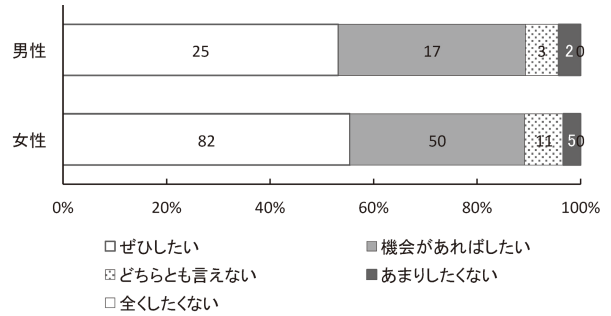


図4 一生を通じて考えた場合、結婚に関する考え。数字は人数を表す。

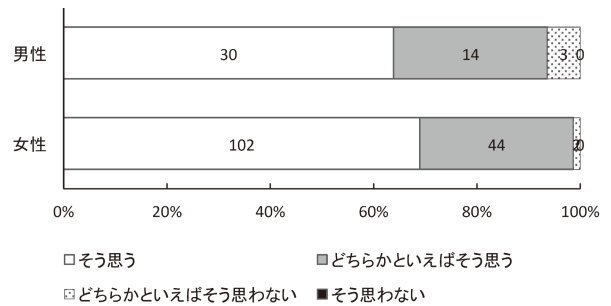


図5 一生を通じて考えた場合、子どもを持ちたいかどうか。数字は人数を表す。

93.6%、女性の98.6%が持ちたいと回答した(図5)。

### 3.3 結婚後の家庭内での役割分担

家事育児分担については、男性の72.3%、女性の57.4%が「半分ずつ」と希望したが、「妻が中心」と考える女性が40.5%いるのに対し、男性は25.5%であった(図6)。女性の学科別の特徴として、N学科とCSD学科は「半分ずつ」がそれぞれ66.1%と68.0%で他学科より高い割合を示したが、PT学科とOT学科はいずれも「半分ずつ」と「妻が中心」が50.0%ずつであった。一方、家計の収入については、男性の63.8%、女性の53.4%が「夫が主で妻が補助」を希望したが、「ほぼ平均に」は男女それぞれ、27.7%、44.6%であった(図7)。女性の学科別では、HW学科とCSD学科では、CSD学科の「夫のみ」も含め、夫が主とする割合が他学科より高い(67.7%、64.0%)傾向が見られた。

### 3.4 働き方

男性の91.5%は、子どもがいてもずっと仕事を続けるという「就労継続型」であった(図8)。女性は、子どもができたらず一旦仕事を辞めるが子どもが大きくなったら再び働くという「一時離職・再就労型」が55.4%、「就労継続型」は37.1%であったが、学科によって異なる傾向を示した(図8)。N・OT・CSD・HW学科では、子どもができるまでは仕事を続けたいとい

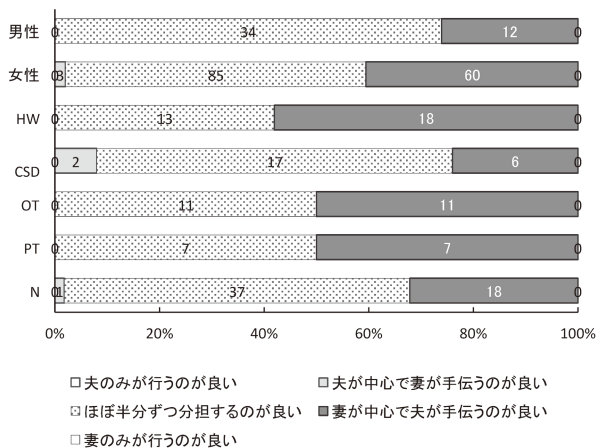


図6 結婚した場合、夫と妻の家事・育児分担についての希望。数字は人数を表す。女性については学科別も示す。

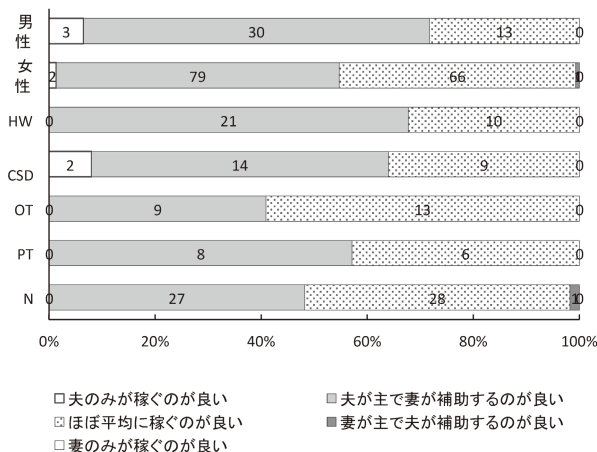


図7 結婚した場合、夫と妻の家計の収入についての希望。数字は人数を表す。女性については学科別も示す。

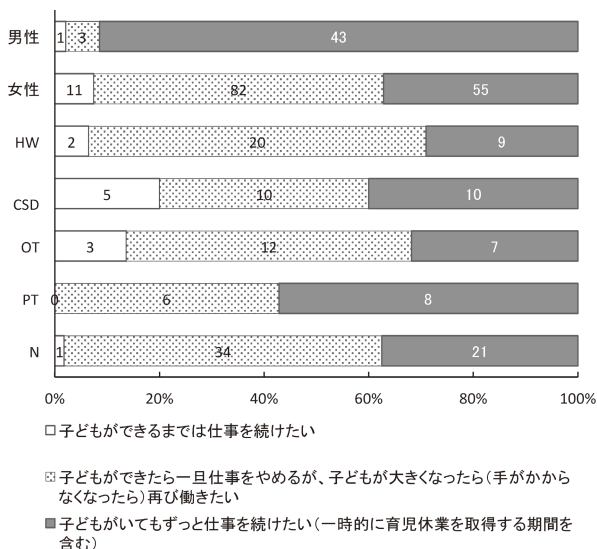


図8 子どもを持つ場合、一生を通じた働き方についての希望。数字は人数を表す。女性については学科別の集計結果も示す。

う「出産退職型」と「一時離職・再就労型」を併せるといずれも6割を越え（それぞれ62.5%、68.0%、60.0%、71.0%）、その中で「出産退職型」の割合が最も高いのはCSD学科（20.0%）であった。一方、PT学科は「就労継続型」が57.1%、「一時離職・再就労型」が42.9%で、「出産退職型」は見られなかった。

### 3.5 医療職の就労継続問題

女性医療従事者（特に医師や看護師など）の離職が医療従事者不足の一因になっている問題に関して、男女ともほとんどが知っている（それぞれ91.5%、89.9%）と回答した（図9）。女性医療従事者が育児や介護と仕事の両立を困難にさせている要因として考えるのは、選択の多い順に「職場内の支援制度の不備」、「社会の支援制度の不備」、「配偶者（パートナー）の無理解や無支援」、「男性上司や男性同僚の無理解」と続き、「女性上司や女性同僚の無理解」や「女性上司や女性同僚の無理解」の選択は多くなかった（図10）。女性医療従事者が育児や介護と仕事を両立させてキャリアを継続するために有効と思われる取り組みについては、選択の多い順に「配偶者の育児・家事・介護への積極的参加」「病院内保育所（病児・病後児保育含む）の整備」「勤務時間の短縮や勤務時間帯の弾力化」「上司、同僚の意識改革」と続き、「早期からの女性（または男性）へのライフデザイン教育」などの選択は多くなかった（図11）。

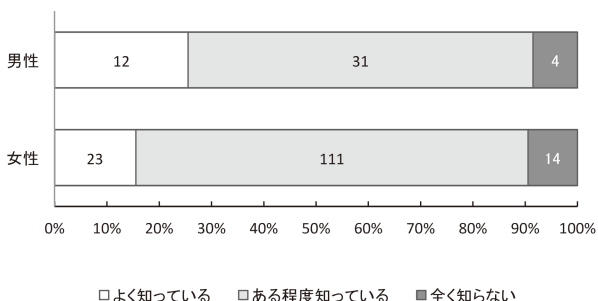


図9 女性医療従事者の離職の一因が家庭と仕事の両立の困難さにあること、そのことが医療従事者不足の一因にもなっていることについて。数字は人数を表す。

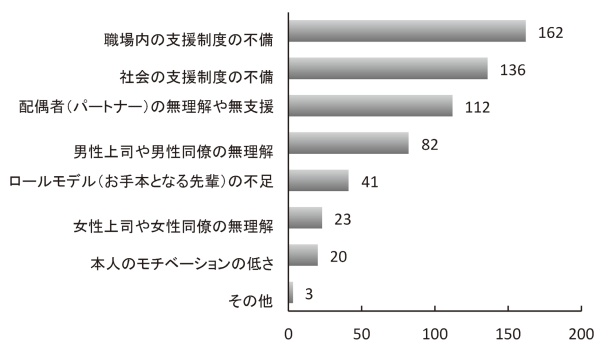


図10 女性医療従事者が家庭と仕事の両立を困難にさせている要因（複数選択）

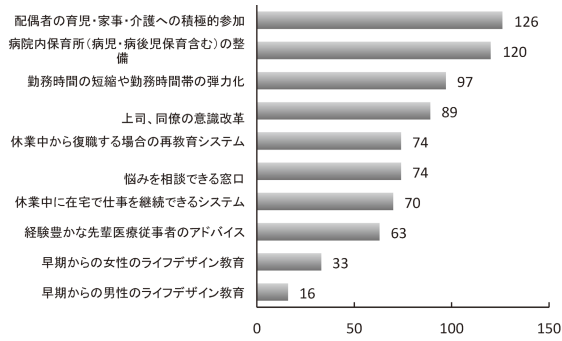


図11 女性医療従事者の離職防止に有効な取り組み(複数選択)

### 3.6 男性の育児休業

「男性が育児休業を取得すること」についての考えはほとんどが肯定的で、選択の多い順に「男性が子育てに参加するよい機会である」「パートナーの支援になる」「子供により影響を与える」などであった(図12)。

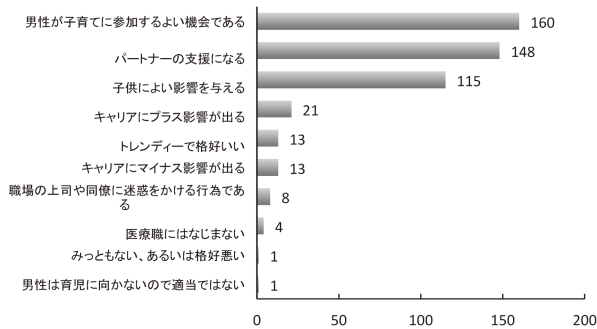


図12 男性の育児休業取得についてどう思うか(複数選択)

### 3.7 離職からの復帰時期

子育て中は一時的に離職するが子どもが大きくなったら(手がかからなくなったら)復職すると考える場合の復帰の時期を問うと、性別、学科により様々であった(図13)。しかし、出産後3年までの時期で区切ると、女性の学科別で特徴が認められた。PT学科は出産後3年までの時期に復帰すると答えたのが50%を占めたのに対し、N・OT・CSD・HW学科ではそれぞれ33.9%、36.4%、28.0%、29.0%であった。さらにPT学科では、復帰時期の選択は小学校入学が最後でそれ以降はないのに対し、N・OT・CSD・HW学科では、中学校入学以降高校卒業までを併せた人数がそれぞれ19.6%、27.3%、20.0%、25.8%を占めた。

## 4 考察

本稿は、筆者が県立広島大学保健福祉学部の平成26年度1年生に対し、全学共通教育科目「フレッシュ

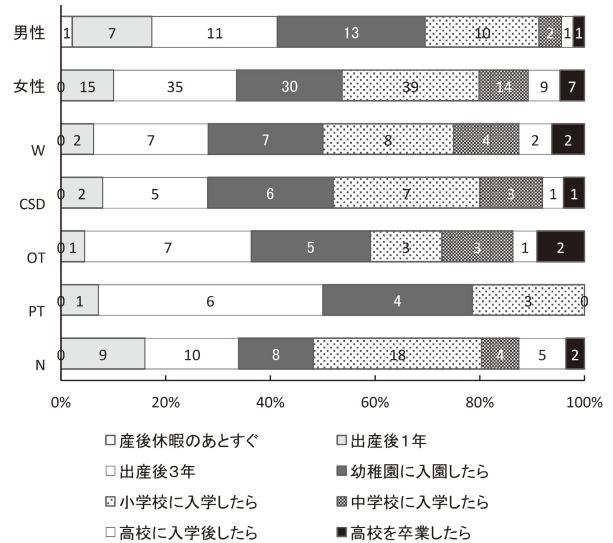


図13 出産・子育て後復職する場合の時期。数字は人数を表す。女性については学科別も示す。

マンセミナー」の合同講義の一つとして行った講演：「医療系大学を選択したあなたはどんなライフプランを選択するのか」の講義資料とするために実施した意識調査の結果を紹介したものである。この結果を概観すると次のようになる。1) 「男は仕事、女は家庭」や「子育ては母親」という男女の役割分担に対する考えについては、大多数が否定的に捉えていた。2) 結婚をすること、子どもを持つことは男女とも大多数が希望していた。3) 家事・育児分担を「ほぼ半分ずつ」と考えるのは女性より男性の方が多く6割以上を占めるが、家計の収入に関しては男女とも半数以上が「夫が中心で妻が補助」を希望していた。4) 子どもを持ったあとの働き方は、女性では「出産退職型」と「一時離職・再就労型」を併せるといづれも6割を越えたが、PT学科だけは半数が「就労継続型」であり「出産退職型」が見られなかった。5) 大部分が女性医療職の就労継続問題に対する認知があり、家庭と仕事の両立が困難な原因や支援制度についても回答できた。6) 男性の育児休業取得については男女とも肯定的であった。7) 一次離職したあと復職する場合の時期について、女性では出産後3年までの時期を選択したのはPT学科で5割を占めたが、それ以外の学科では3割前後に留まった。

これらの結果を、同様のアンケート調査を行ったしまね女性センターや島根大学附属病院ワークライフバランス支援室のものと比較するとたいへん興味深い。本学部の学生は島根県立大学の場合より伝統的な男女の役割等に関しては保守的ではなく、男性では特に家事分担意識の高いことが注目された(図6)。その一方で、島根県立大学短期大学看護学科や島根大学医学部医学科の1年生では、およそ6割の女性は子どもができて働き続けたいという希望を示したのに比較

すると、本学部ではこのモチベーションの割合が低く、「就労継続型」は女性全体の37%であった(図8)。PT以外どの学科も半数以上の女性は「一時離職・再就労型」を希望しているため、「子育てに手がかからなくなったら復職する」というプランを描くことができるようである。しかし問11の回答(図13)を見ると、復職の時期はいついつになるのか、まして子どもを複数持つ場合にはどうなるか、と考えざるを得ない。このことは、今回の調査の中で最も注目された結果である。島根の2大学と本学との違いは何によるものだろうか。学生の出身地の違いによる地域性などが関連するのか。あるいは、最近の世論調査では、以前と比較して若い女性(20代)の専業主婦願望、仕事より家庭生活の優先度が増加しつつあるとも言われる<sup>11,12)</sup>。このような世論の動向とも関係するのであろうか。いずれにせよ、ライフコースを考える上で、仕事より家庭生活と子どもの優先度の高いプランを思い浮かべている女子学生が多いことが伺える。

今回の意識調査は学科によって学生数や男女の比率が異なる対象への単年度の調査であり、本稿でも単純集計による考察しか加えていない。上述のように、設問によっては学科間で異なる傾向が認められたものの、今回の結果が医療系学生の意識における専門領域間の差異や性別による特徴を表していると結論づけることはできないであろう。一方で、アンケート実施時期(4月末)を考えると、本学に入学して間もない、まだ医療系大学生としての本格的な専門教育を受けていない状態の学生の意識を捉えていると推察することは重要である。つまり、どのような目標を持って本学のその学科を志望したのか、またその志望動機を決定する材料になったのは何か、周囲からのどのようなアドバイスや情報を得て自分の方向性を選択したのか、そして、そのことに本学はどのような材料を地域や受験生に提供してきたか、などにも大きく関わってくる問題である。今後、本学の他キャンパス、他学部1年生に対して、あるいは就職先が決まった段階の本学部の4年生に対しても同様な意識調査を行い、比較検討していくことも必要になろう。

筆者は、HWを除く4学科の1年生前期には「解剖学概論」を、後期にも引き続き各学科それぞれの専門性に併せた解剖学の領域を「特論」などとして講義している。このように本学のカリキュラムでは、1年次に解剖学や生理学などの基礎医学関連の単位を取得しなければならず、入学直後から学生には相当な努力を強いることになる。この場合、基礎医学を学ぶ姿勢やその成績と、各学科の専門性に対する学生のモチベーションとは決して無縁ではないと考えられる。学生が将来のキャリアに対してどんな展望を持って1年次を過ごすかは、われわれ基礎医学講義担当の教員にとっても看過できない。今回の調査結果は、著者にとって

も1年生への講義を通して自らの役割を再確認するきっかけとなった。暗記一辺倒、国家試験対策のための「解剖学」ではなく、人体の緻密さ、その仕組みの巧みさへの興味を引き出し、それをきっかけに各学科の専門性へと誘うことができるような講義内容・スタイルの工夫を今一度考えたいと思う。本学は医療系の専門職養成機関の一つである。初年次とはいえ、仕事の継続、キャリア形成などをライフコースの中に思い浮かべるすべのない学生をそのままにしておく訳にはいかないであろう。

前述のように、島根で筆者が関与した医学生への意識調査の結果、特に男性職員・学生への家庭責任への啓発教育、先輩医療職カップルのロールモデル呈示などの必要性が浮かび上がった<sup>11,12)</sup>。今回の意識調査では、医療系大学の学生がライフプランと共に医療専門職としてのキャリアプランも描くためには、在学中に何を考え、実行しなければならないかを引き出せるようなキャリア教育の必要性が強く示唆された。

## 5 おわりに

フレッシュマンセミナーの合同講義では、医療系学生の意識調査結果に加え、筆者が島根で関わって来た女性医療職・研究者支援事業も紹介した。専門性の高い職種は一旦離職すると復職が容易ではない現実があること、それにも負けず、現在多くの女性研究者や医師たちが、柔軟な発想で様々な結婚形態を取りながら、育児・家事とキャリアの両立に奮闘していること、などを事例も交えて紹介した。講演後には学生に自由記載形式のレポートを課したが、その中には、国家資格を持っていれば子育てなどで一旦離職しても復帰が容易であると周囲から聞いてきたのに、そうではないと聞いて驚いた、という感想や、自分はやはり子どもにさみしい思いをさせたくないで育児を優先する生活を選ぶ、という内容のレポートも少なからず見られた。1年次の素の彼らが、今後の学生生活の中で医療系学生としての意識を醸成させ、卒業時には末永く社会にその専門性をもって貢献しようと決意ができるかどうかは、我々教員の責任に負うところが大きいのではないだろうか。

## 6 謝辞

アンケート用紙の配付と回収にご協力頂いた、「フレッシュマンセミナー」各班担当の教員のみなさまに感謝申し上げます。

## 7 文献

- 1) 澤アツ子, 津森登志子: 女性研究者・女性医師支

- 援を軸とした島根大学における全学的な男女共同参画への取り組み. 医学のあゆみ, 234:173-181, 2010
- 2) 津森登志子: 外部資金獲得を機に開始された島根大学での女性研究者・医療職支援事業の紹介. 解剖学雑誌, 88:61-66, 2013
  - 3) 内田伸恵: 女性医師・看護師の臨床現場定着および復帰支援 新しいキャリア継続モデル事業 - しなやかな女性医療職を目指して -. 文部科学時報, No.1584:33-34, 2008
  - 4) 島根大学医学部附属病院女性スタッフ支援室: 新しいキャリア継続モデル事業—しなやかな女性医療職を目指して—最終事業報告書(2007-2009), (オンライン), 入手先< <http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/woman/> >, (参照 2014-8-28)
  - 5) 島根大学医学部附属病院ワークライフバランス支援室: 平成 22 ~ 23 年度ワークライフバランス支援室事業報告書, (オンライン), 入手先< <http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/wlb/report1/info8.html> >, (参照 2014-8-28)
  - 6) 日本医師会: 調査報告書【H.21.3: 女性医師の勤務環境の現況に関する調査】. 日本医師会, (オンライン), 入手先< [http://www.med.or.jp/doctor/female/research\\_surround/](http://www.med.or.jp/doctor/female/research_surround/) >, (参照 2014-8-28)
  - 7) 津森登志子, 内田伸恵: 医学生へのキャリア教育・ロールモデル提示としての新しい試み:「ランチョ  
ン・トーク」. 医学教育, 43 (suppl) :89, 2012
  - 8) 津森登志子, 内田伸恵: 医療人 GP 事業による「医療職の就労継続に関する医学生の意識調査」アンケート結果について. 医学教育, 42 (suppl) :63, 2011
  - 9) 津森登志子: 医療職における男女共同参画をめざしたワーク・ライフ・バランスの在り方～女性スタッフ支援室の取組から～. 財団法人しまね女性センター編, 平成 21 年度ライフデザイン支援ブックレット 学生のためのライフデザイン講座記録集. 島根, 財団法人しまね女性センター, 22-27, 2010
  - 10) 公益財団法人しまね女性センター: 男女共同参画社会と大学生の意識～「大学生向けライフデザインに関するアンケート」結果の概要～. 啓発誌「しまねの女と男」, 35:2-3, 2013
  - 11) 内閣府大臣官房政府広報室: 男女共同参画社会に関する世論調査. 内閣府大臣官房政府広報室, (オンライン), 入手先< <http://www8.cao.go.jp/survey/h24/h24-danjo/index.html> >, (参照 2014-8-28)
  - 12) 国立社会保障・人口問題研究所: 第 14 回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要. 国立社会保障・人口問題研究所, (オンライン), 入手先< [http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14\\_s/doukou14\\_s.asp](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.asp) >, (参照 2014-8-28)

## 8 付録

### 「1年生対象意識調査アンケート」

以下の問いに該当する回答の番号を○で囲んでください。

あなたご自身についてお聞きします。可能な限り回答をお願いします。

所属学科 1, 看護 2, 理学療法 3, 作業療法 4, コミュニケーション障害 5, 人間福祉  
年 齢 1, 10代 2, 20代 3, 30代  
性 別 1, 女性 2, 男性

問1. 次の考え方について、あなたはどのように思いますか？もっとも近い考えを選んでください。

(1) 「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」

1, そう思う 2, どちらかといえばそう思う 3, どちらかといえばそう思わない 4, そう思わない

(2) 「女性には細やかな気配りが、男性にはいざというときの決断力が必要だ」

1, そう思う 2, どちらかといえばそう思う 3, どちらかといえばそう思わない 4, そう思わない

(3) 「子育ては母親がするべきだ」

1, そう思う 2, どちらかといえばそう思う 3, どちらかといえばそう思わない 4, そう思わない

問2. 一生を通じて考えた場合、あなたの結婚に関する考えは次のうちどれですか

1, ぜひしたい 2, 機会があればしたい 3, どちらとも言えない 4, あまりしたくない  
5, 全くしたくない

問3. 一生を通じて考えた場合、あなたは子どもを持ちたいと思いますか

1, そう思う 2, どちらかといえばそう思う 3, どちらかといえばそう思わない  
4, そう思わない

問4. あなたが結婚した場合を想定して、夫と妻の家事・育児分担についてあなたの希望に近いのはどれですか（既婚者の場合は現在の考えについて教えてください）

1, 夫のみが行うのが良い 2, 夫が中心で妻が手伝うのが良い 3, ほぼ半分ずつ分担するのが良い  
4, 妻が中心で夫が手伝うのが良い 5, 妻のみが行うのが良い

問5. あなたが結婚した場合を想定して、家計の収入についてあなたの希望に近いのはどれですか（既婚者の場合は現在の考えについて教えてください）

1, 夫のみが稼ぐのが良い 2, 夫が主で妻が補助するのが良い 3, ほぼ平均に稼ぐのが良い  
4, 妻が主で夫が補助するのが良い 5, 妻のみが稼ぐのが良い

問6. 仮に子どもを持つという選択をした場合、一生を通じた働き方についてあなたの希望に近いのはどれですか

1, 子どもができるまでは仕事を続けたい  
2, 子どもができたら一旦仕事をやめるが子どもが大きくなったら（手がかからなくなったら）再び働きたい  
3, 子どもがいてもずっと仕事を続けたい（一時的に育児休業を取得する期間を含む）





# **Co-medical students' attitudes toward gender equality, lifestyle, and sustainability of careers**

## **—A questionnaire survey of first-year students—**

Toshiko TSUMORI

Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

### **Abstract**

The study surveys first-year students from the departments of nursing, physical therapy, occupational therapy, communication sciences and disorders, and human welfare, belonging to the Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima. Attitudes of these co-medical students toward professional sustainability were examined by means of a questionnaire regarding gender equality, lifestyle, and motivation for continued employment. The study finds that most students have negative feelings toward traditional gender roles, and over 60% of female students, except for those from the department of physical therapy, were not motivated to continue their careers after pregnancy and child-rearing. The study concludes that professional education as well as gender equality and career guidance are essential during the early stages of co-medical education.

**Key Words** : co-medical students, gender equality, career education, sustainability of careers